

建築実務演習の概要

日時：2005年10月17日

会場：東月隈公民館・老人いこいの家

講師：末廣 香織氏(有) NKS architects)

福岡で11年間やっていて、大学や会社で設計をしている。この東月隈公民館は住宅ばかりを設計してきた自分たちとしては特殊な建物で、公共建築は最近(3年前)の小学校が最初だった。

東月隈公民館・老人いこいの家

プロポーザル方式で案を出し、選ばれて設計が決まった。なぜプロポーザル方式かという、福岡市が数年前から3~40年前の老朽化した公民館などを年に数館ずつ建て替えていて、有識者(大学教授など)から『何も工夫の無い建物じゃあないか』などの、プレッシャーによってプロポーザル方式となった。審査員として、福岡大学:黒瀬教授・市の課長など…。しかし、10館の建て替えのうちプロポーザル方式は5館で内オープン形式は2館のみとなっている。



最初の提案

- 交通量の多い交差点に対し、この場所での活動が外にわかりやすいように。
- 団地エリアなので夜の人通りの寂しさを無くせるように、外に明かりを照らす行灯のような建物となるように。

これがプロポーザルで選ばれた案だったが、市の事情により「プロポーザルの案を無視して、0から考え直してください。」と、いきなり言われた。

住民たちにアンケートをとり、部屋の大きさなどは厳密に決められていて、建物全体としては影響は無かったが、「駐車場を多くとってほしい。」との意見が多かった。これが一番のプランの転換点となった。

そして、自分たちはプランをA~Iまで9案作り、「自分たちは〇〇案が一番いいと思う。」と、住民に説明して決定する形をとった。

一番重視したのは体感治安の向上で、夜さびしくなるこの町を感覚的に安心感の持てる町にするために、建物自体を照明器具のようなものにしたかった。もうひとつは建物の内・外部を視線で結びつける一中から外・外から中が見えるように。駐車場の確保と屋外空間の積極的利用。イベント空間としても使えるような、快適な室内環境の提供。となりに高

層建物が建つので、隣地境界から建物までの距離を取り、通風・採光の確保。解放的な人が集まれるロビー空間の設置を目指した。これらを満たすA～Iの9案のうち、E案に決定…多少強引に。



平面計画 1F:老人憩いの家・地域団体室・児童等集会室・事務室
2F:講堂兼学習室・和室

1階部分はロビーと庭両方につながる開放的な居室を配置。それは1階の小部屋を同じ扱いにし、2階部分は防音や暗転に対応した天井の高い大部屋一空港が近いため・暗転しての使用のため一むしろ開放的にせず閉鎖的なほうが良いとなり、今の形となった。ロビーから2階へのアクセスをスムーズにした。駐車場と庭はアスファルトだけでなく芝や樹木で緑化。講堂がなぜこのような形—天井3m+トップサイドライト3m以上—になったのかというと、福岡市の基準で「講堂の高さは3m」と決まっているが、「織り上げ天井は可」とのことで、採光のためも含めこの形に決まった。諸室の天井高も2.5mと決まっている。しかも面積もある程度決められていて、一方のスパンは決まっていたので、構造的に何の意味も持たないバラバラなスパンとなった。

自分たちはロビーを広く取りたかった。玄関→ロビー・廊下→研修室となっている。この研修室は実際は部屋にするべき場所であるが、ロビーの一部を研修室にすることにより、ロビーを少しでも広くしたかった。児童等集会室—本来の基準より少し小さいが、一部を児童書コーナーとして取り、子供たちが人目につく場所で安心できるようにして、ロビーを広く取るということもした。

諸室—何かイベントの時には仕切りをはずし、何かイベントのときには、広場側とも一体的に使えるようにした。

講堂—トップから採光することにより、両側から光が入ることによって片側採光よりもやわらかくなる。テラス—和室・学習室の延長としても使え、夜には宴会なども。

デザイン上一番特徴的なのは道路側の壁のような柱のような部分で、構造的には水平力はまったく受けない。鉛直力（屋根荷重）だけが働いている。

大きな問題点として、自分たちは建物の意匠だけを任せ、設備は別の会社が担当し、まったく打ち合わせが出来ず、非常に苦勞した。中でも一番苦勞したのが照明器具で、福岡市の公民館の基準として部屋ごとに決められているが、デザイン上あまりにみっともないものとしたくなかったので、証明ボックスを作ることにより、これを打開した。

質疑応答

- テラスと和室をつなぐ窓が低いのは何か理由があるのか？

和室の窓が高いとスケープアウトしてしまう。座ったときの目線を考慮して和室のスケール感を出すため、1.2~1.3mとなっている。私たちへのアドバイスとして、スケール感を抑えるためには、あまり高いと視線が高くなり落ち着かなくなるので、場合によっては低くすることで、落ち着いた空間にすることが出来る。

- 階段の段差が高いのには理由が？

普段使いようと特別な場合の階段とを分けて考え、け上げ高を約 30 c m とすることで特別なとき以外はベンチとしても使えるように設計されている。

- 写真で見たとき、周りのイメージがごつく感じ、ロビーの中に入ったときにも感じたが、周囲を黒くした理由は？

黒いのは板金（スチール製）で、コンクリートのうえにどんな色をつけるべきかいろいろと悩んだ。理由は、中の様子がよく見えるように。屋内・室内は外が明るいと暗く見え、中が見えにくくなってしまうので、逆に外壁を暗くすることで内部を見えやすくしようと考えたため。もうひとつの理由としては、外壁の表情を街路側と逆の駐車場側との対比をとろうと思ったため。

- ロビーの柱の寸法には意味があるのか？

模型を何度も作りどうすれば一番内部が見えやすくなるのかを検討した。イメージとして昔の町屋の格子戸っぽい形としたかったので、スケールを細かくすることで、車から見た場合でも中が見え、そのイメージが残るように考えた。ほかにも構造やコストの関係で大きさが決まった。

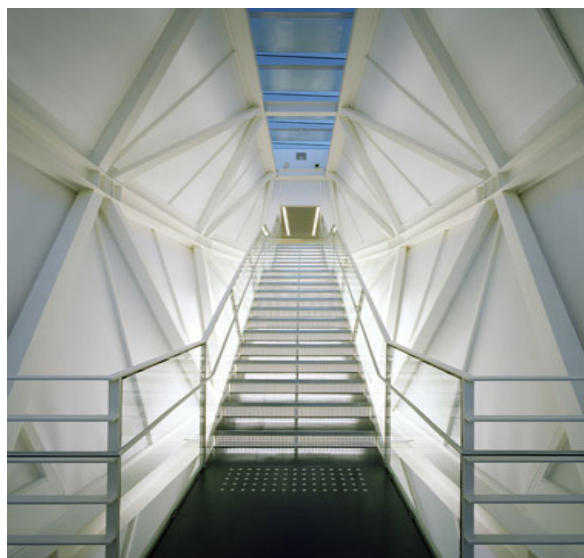
西有田町タウンセンター 敷地面積:4800 m²
建築面積:2000 m²
延べ床面積:約 3200 m²

町役場ではなく「タウンセンター」という名前となっているのは、町が合併するためで、コミュニティセンターとして建物を残しておくため。そこで、プロポーザルが行なわれ、決定した。



設計の目標

- 人々が気楽に立ち寄れて時間の過ごすことの出来るアクティビティーの高い施設
- 西有田町のシンボルとなるような印象的な建物
- 将来的な機能の変化に対応するフレキシブルなシステムの導入
- 平面・構造・設備などの機能が融合した合理的な計画
- 環境負荷が低く長期的なランニングコストの抑制



もともと敷地内に役場が建っていて、南側に細長い庭園状のものを作り、それに対して屋根のような建物を作ることを提案した。東に面した国道から見て、建物がよく見えるレイアウトにしようと考えた。南側を開放的にすることにより、良好な室内環境の確保をしようと考えた。高低差が約8メートルあるのでそれをうまく利用しようと考えた。建物が結構べったりした奥行き深い建物なので、普通に窓を取っても光が奥まで入り込まず、風も通らないのでスリットを取ることにした。そのスリットから出入りが出来るようにした。北側は駐車場である。1F—M 2F—2Fという断面構成になっている。もともとの庁舎が建っているため工期は二期に分けられた。

クレーン—模型を何度も作って試作した。20数mの屋根(2F)を支えるための水平力をどのようにして逃がすか考え、対策として、カウンターウェイトを含めた「クレーン」と呼ばれるものを作った。水平力を持たせるために少し膨らんだ形となっている。これを建物のメインの要素にしようとした。4つのクレーンを半透明の膜で覆い、明かり取り・階段室・構造を一体としたものにした。内部は階段の下に照明があり、クレーン自体が1Fを照らす照明となる。上部に日光よけのパネルがある。自家発電のための「マイクロガスタービン」を備える。

建物を作るとき、日常の普段使うとき以外の場面があって、そういうときのきっかけとなるような仕掛けを作りたいと思っている。

佐伯の住宅

老夫婦二人の住宅で、母屋と離れをつなぐデッキがあり、広い奥行きを取っている。そのスペースで、主人が近所の人を集めてコンサートを開いたりしている。こういうシカケに建物がなるようにと考えている。たとえば、西鉄福岡駅のコンコースのような



質疑応答

■ 南面のガラスのフレームをランダムにした意図は？

南側の開放感を出すため。もう一つは、敷地が段になっているので直線にすると地面に突き刺さってしまうのでランダムにした。そもそも、自分たちの趣味として味気ないものは好きではないので、職人さんたちが作ったアートが残っているものを使いたかった。

■ 設計をするときの手がかりは？

西有田町タウンセンターの場合、プロポーザルで「大きな屋根のある建物」は決まっていたが、問題はそれをどうやって現実の建物にするのかであって、構造・環境・デザイン・計画など…これらの問題を解くためにはいろいろな知識が必要で、カンが働かないといけないと思う。そういうトレーニングは必要だと思う。そのときに自分たちは模型を作ってみて、出来るかできないかを判断していく。

クレーンというものを造って、デザインの要素にしようと思ったきっかけは、一つのものにいろいろな役割を持たせようとし。この場合、普段一緒にしない照明・構造・階段室といった機能を一緒にするとオモシロいのでは？と、思ったため。



最後に

Idea を実現するために、実際には経験や知識も必要だが、最初のコンセプトをどうやって守るか、どれだけ妥協せずに済ませるか、ということがいろいろな能力を要求される。そのためには単に強引にする場合や、説得するための材料を論理的にいかにかに説明できるか。これらの工夫が必要であると思う。

編集者： 岩切 尊志、篠崎 正志、宮崎 恵太、中野 広教、和田 尚大